

(清水町) 清水ミライ自分ごと化会議 議事メモ

全体コーディネーター	伊藤 伸
日時	令和2年7月18日(土) 14時00分から17時12分まで
場所	清水町ハーモニープラザ(清水町本通1丁目1-2)及びオンライン
その他	グループコーディネーター 1班 伊藤 伸(構想日本) 2班 渡辺浩二(十勝の未来を考える自治体職員の会:芽室町職) ナビゲーター 1班 香田裕一(十勝の未来を考える自治体職員の会:幕別町職) 2班 藤谷満伸(同上:大樹町職) 参加者数 16名 欠席者数 35名 傍聴者数(町民) 1名、(町外) 2名、(報道) 0名 事務局 前田 真(企画課長)、川口二郎(企画課長補佐)、 田村幸紀(企画課政策企画係長)、木村翔(企画課政策企画係主事)、桂井那津未(企画課政策企画係主事)、川岸祐仁(構想日本)

趣旨・概要

第6回目のテーマは「少子高齢化・情報発信」

- (1) 第1回~第3回は、アンケート結果で「まちの強み」をテーマに、1テーマを1回の開催で完結させてきたが、第4回からはアンケートで意見が多く出た「少子高齢化」と「情報発信」といった、「まちの課題」について議論を進めるため、3回継続して同一テーマで議論する。
- (2) 少子化対策では、子育て環境の充実策として、出産環境や子育て環境、子どもの遊び場の充実が挙げられる。また、高齢化への対策として、それらに対する行政の役割交通弱者への対策は十分か。路線バス等がない中、町民の足を確保する交通網を形成するために必要なことは何か。
- (3) 情報発信では、町民アンケートやこれまでのミライ会議においても共通して挙げられた内容であることから、現在の情報発信方法等の整理をした中で、今の時代にあった発信方法を検討した上で、個人・地域・行政それぞれの立場から何が必要かを考える。

全体会として前回会議の振り返りを行ったのち、ナビゲーターを交えて2つの分科会に分かれて、これまでの議論のまとめを行った。

## テーマについて議論

### 第1班 少子高齢化班

コーディネーター：伊藤 伸（構想日本）

ナビゲーター：香田 裕一（幕別町職員）

コ：これまで高齢化と子育てに分けて話をしてきた。提案書の1～3番が少子化・子育てについて、4～5番が高齢者について、6番が町内外へのPRの内容となっている。

提案1は「清水町の子育て支援は充実していることがわかった。制度はある程度出来上がっているの、あとは育てやすい環境づくりをこれまで以上に作る事が重要になる。特に障害を持つ子どもへの理解はまだ不十分なので、当事者だけでなく町民全体で支える雰囲気を作っていく必要がある」としている。子どもを産み育てる環境の中で、普通の子ども達だけでなく、障害を持つ子ども達も含めてみんなが過ごしやすい、育てやすい環境を作っていく提案となっている。

提案2は「清水に残りたい、一度町外へ出て戻ってきたいと考える町民も少なくない。しかし、働く場がないことで清水を離れる人もいる。清水、もしくは十勝として働く場を確保することで「清水に住みたい、戻りたい」を実現できるようにする。一方で農業は後継者不足が言われているので、働きたい人と働いてほしい側のマッチングも進めていく必要がある」としている。子どもや若い世代が帰りたいたいと思ってもらえるような受け皿を用意するためにも、働く場について農業の後継者不足も含めて考えていく必要がある。

提案3は「公園の遊具の老朽化についての意見がとて多かった。一方で、外で遊ぶ子どもが年々減少しているので、整備しても子どもたちは遊ばないのではないかという懸念の声もあった。まずは、子どもたちが安心して外で遊べるよう整備しつつ、遊具に限らず子どもたちが遊びたいと思えるような魅力を作るための方策を検討していく必要がある。」としている。遊び場の環境整備は遊べる環境と遊びたいと思える意識の部分の2つがある。ハード的な整備だけでなく、魅力のある遊び場とは何なのかを考えていく内容となっている。

メ1：提案1の「空気」の表現を少し変えた方がよいと感じた。「特に障害を持つ子ども」ではなく「特に障害を抱える子を持つ親子」のような親子も含めて町で支えていく体制づくりのような表現の方が伝わりやすいと思う。提案1の中の行政の⑥子育て、教育、就労、福祉などをつなげていく体制、仕組みづくりを行政が担っていくべきと思う。

コ：生まれてから死ぬまで常にサポートできるような仕組みを行政が作っていくということ。

メ1：障害を持っていても死ぬまで、また親が死んだ後も清水で生きていけるように支えていく体制を行政が作るということが網羅されると良いと思う。

コ：今の清水町の体制では障害を抱える家族を支えきれていないということか。

メ1：支え切れていない。他職種とのつながりががないため、障害を抱える親子がどこに相談してよいかわからない現実がある気がする。これを解決するためには、いろいろな職種の理解を得る必要があり、そこをつなげていく役割が行政だと感じる。

コ：発達支援センターは福祉と教育的な視点も入っているが、そこだけではカバーしきれていないのか。

メ1：カバーしきれていない。発達支援センターが障害を抱える子どもを支えるために問題提起をして、理解を進めるだけの力がなかったと思う。

コ：身の回りで障害を持つ人の環境などについて感じることはあるか。

メ2：健常者の人が大人も含めて、人を人として思っ接することが少ない。清水町ではそこまで感じないが、都会では障害者に対して好奇な目で見ることが多い。人として尊厳を持って接することができるように意識改革をすることが必要だと思う。また、就業支援施設が必要だと感じる。

メ1：清水町には「ともに園」という就業支援施設がある。しかし、支援の対象とならないグレーな人がいるため、これらの人に対しての支援が必要。このグレーな人たちがそのまま大人になったときに一つの仕事しかできない場合もある。グレーな人を救えるようなシステム作りが提案書に網羅できると良いと思う。

メ3：障害者に対しての接し方がわからない。普通の子どもに対しても怪しい大人にみられる可能性があり、なるべく接しないようにする環境ができてしまっていると感じる。悩みを抱えている親に対しても家庭の問題にどこまで介入してよいかわからない。

コ：昔は障害をもつ子どもを隠すという風潮があった。こういった意識面が変わらないと、制度をどれだけ整えても何も変わらないと感じる。実際に悩みを抱えている人と接することが重要だと感じるが、今はまだそのような場はないと思う。

メ2：障害をもつ子どもを抱える親をどう引っ張り出すか。子どもが障害者と接することで同じ人間だという認識を持てば、子ども同士で助け合うことができる。そういう町になってほしい。

ナ：幕別町役場では障害者雇用の枠がある。その人たちが窓口業務を行うと、仕事が遅く住民とのトラブルになってしまうことがあるため、人と接しない業務を担当してもらうことが多い。これは住民にとっては良いことかもしれないが、障害者本人に対しては良いことなのかジレンマがある。住民は障害を持っていることがわからないので、そこをどう理解してもらうかがすごく難しいと感じる。

メ4：親戚に視力障害を持った子どもがいる。障害を抱える子どもを親がいつまでも面倒を見ることができないため、自立できるよう努力をしていた。今では手に職をつけて、一人でも生きていけるようになった。視力以外は健常者と変わらないため、特別扱いする必要はないと思う。しかし、障害者に対してネットでなにを言われているかわからない社会になってしまった。また障害者に限らず、大人が子どもに文句を言うような時代になってしまった。子育てをする以前に大人を育てなければいけない。弱い人達のことを考えられる時代にならないといけない。

コ：ネット社会も含めて全体が排他的になっている。今の議論はとても重要だと感じるため、これからの総合計画に記載されると良いと思う。

メ5：子どもたちが外で遊べる環境を整備することについて、老朽化対策は必要だと思うが、子どもが外で遊ぶことが少なくなってきたため、公園の新設は必要ではないと思う。

コ：子どもの中でも価値観の対立はあると思う。以前に子どもはもっと外で遊ぶべきという意見があった。公園を作ったら遊ぶのか。作っても遊ばないのであれば、今の子どものニーズに合わせていくという考えもあると思う。提案書にも記載をしているが、子どもはゲーム機がなければ工夫をして遊びを作り出す力を持っている。その力を大人が潰しているのではないかと。

メ6：この提案は幼児を対象としていたものだと思う。ゲームに関しての記載は対象が違うのではないかと思う。ゲームをすることがだめなことではない。自分の時間をどう使うかは個人の責任でもあり、外から抑圧するのはどうかと思う。

コ：遊び場の観点は小さい子どもを対象としている。この提案は世代を分けて作られているものではない。

メ7：家庭によっては、ゲーム利用についてルール作りをしているところもある。発達障害の基準がアバウトなため、少しでも何かに引っかかっただけで、発達障害と判断されてしまう。発達障害という定義は好きではないが、このことに関して悩んでいる親も多いと思うので、気軽に相談できる場所があると良いと思う。

メ1：18歳までは発達支援センターで対応しているが、周知不足な部分があると思う。

コ：もしかしたら行政が目指すべきはあらゆる職種、あらゆる世代をつなぐ役割に徹するべきかもしれない。

メ3：子どもの遊ぶ場所が限られていると思う。コロナの関係もあり、居場所が少なくなってきている。特に高校生が車を待つ間の居場所がないと感じる。

メ5：今のゲームは課金制度が一番問題だと思う。課金をすることによって快感を得る場合もある。香川県のようなゲーム規制条例もあるが、本当に規制すべきは課金制度だと思う。また子どもに対して規制をするのは親の役割だと思う。そのためにも親に危険性を伝えて規制を促せば良いと思う。

コ：条例で規制するのではなく、家庭の中でルールを作るべきだと感じる。

提案2についても意見をいただきたい。町内に働く場所を作るという意見も多かったが、清水町では限界があるため、十勝全体で考えなければいけないという意見もあったため、このような提案としている。

メ1：親としては近くに帰ってきてほしいという気持ちはある、しかし、清水町では職種が限られてしまうため、せめて十勝で就職してほしいという思いはある。大人になった子どもと一緒に住みたいと考える親もいると思うが、子どもには自分で生活をして、成長していく姿を近くで感じられれば良いと思う。小さな町で全ての人に対して受け皿を作ることには限界があるので、十勝全体で若い人を増やしていけるような考えの方が良いと思う。また提案書にある働きたい人と働いてほしい人とのマッチングについては特に支援が必要なグレーな大人と企業の間立って、マッチングできる体制が必要だと思う。障害を抱えていることが面接でわからないこともあるため、その人が働き続けられるような配慮も必要。

メ4：若い世代が大学卒業後、帰ってくることは望んでいない。いろいろな経験を積んだ後に清水町に起業家として帰ってきてもらえるような人材の育成が必要だと思う。これからはリモートワークも増えて、社会は変わっていくと思う。農協が育成牛舎の建設を予定している。農協主体の作物を作ってみたらどうかと思う。今は農地の取り合いだが、今後は後継者不足もあり農地が余る可能性もあるため、有効活用をしてみてはどうか。

ナ：子どもたちもゲームばかりしているわけではないため、公園や通信環境など子どもたちの選択肢を増やすための環境づくりが必要ではないか。

コ：前半を振り返ってみたいと思う。どうやって子どもを支えていくかについて、特に障害を抱える親子への支えが足りていないという意見があった。職種に壁がありうまくつながっていない。福祉と教育がうまく連携ができていないことや生まれてから死ぬまでをつなげて考え、行政がサポートしていく必要がある。病名のつかないグレーな人に対してのサポートが必要。障害者への考え方も変えていく必要がある。障害者との接し方や親も負い目を感じ、外に出さないといった意識を変えていく必要がある。体制と意識の両面の見直しが必要。この意識の部分はネットでの匿名での誹謗中傷などにもつながってくるのではないか。無関心だけど排他的な意識がどこかにある。地域コミュニティの大切さにもつながってくると思う。働く場の用意は清水町だけでは限界があるため、十勝全体で受け皿を作る必要がある。その受け皿を作る上でマッチングも必要になってくる。グレーな人と企業のマッチングが重要だと感じる。もう一つは受け皿を用意するだけでなく、若い世代はどんどん都会へ出て、経験を積み清水に帰ってくるような長い期間で考えることも重要。これからはコロナの影響もあり、働き方が変わっていく。大手企業では全社員が出社を不要としているところもある。遊び場の整備については、幼児が対象となっているため、ゲームとの視点を分けて考える必要がある。ルールを作るという視点も必要ではないか。子どもの中でも世代を分けて考える視点も必要ではないか。ここまでが前半の内容だったと思う。

(休憩)

コ：提案4は「高齢化による担い手不足などによって、地域コミュニティが衰退していると感じている人が多い。そうなると、高齢者を地域で支えることも難しくなってしまう。また、以前からいる住民と転入者のコミュニケーションが不十分との声もあった。町内会への加入をはじめとして転入者も含めた地域のつながりを強くするために、行政と住民が一緒になって考える必要がある」としている。

提案5は「高齢者の移動手段が少ないという課題がある一方で、行政が行っているコミュニティバスはあまり乗っていない。地域や民間企業も一緒になって高齢者の足の確保を考える必要がある。また、高齢者が元気に生活するためには、できないことに対する手助けだけではなく、高齢者自身が自分でできることを、自分でできる環境を整えることも大切である。そのために、地域では何ができるかを検討する。」としている。移動手段を確保するにあたって、実際は行政がやっているという話があったと思う。行政だけでなく近所の地域コミュニティも含めて考える必要があるのではないか。

提案6は「今の清水町には充実した医療福祉制度（特に子ども関連）がそろっているが、そのことがあまり知られていない。今の取り組みを町内外にPRすることが、清水町の課題である少子高齢化の改善にもつながるし、町民がより住みやすいと感じてくれることにもつながるので、伝え方の工夫をする。」としている。これが清水町の魅力につながるのではないかとい

う意見もあった。

メ2：清水町ではたくさんのお祭りがあるが、高齢者1人ではそこまで行くこともできない。行きたい気持ちがあるかわからないが、人と人とのつながりの中で手助けすることができれば、生きがいにつながることもあると思う。鹿追町などでは花街道を整備している。清水町でもやっても良いのではないかと思う。ゴミの不法投棄の抑制にもつながると思う。高齢者にも手伝いをお願いしながら、道路沿いにプランターを置いて花を植えるだけでも生きがいにつながる。

事：他の町ほど大々的にはやっていないが、国道274号線沿いにプランターを置いている。今年はコロナでできていない。また、旧国道は毎年クリーンデイという清掃活動も行っている。

メ4：昔はどここの地域にもたくさんの子どもがいた。現在は子どもが少なくなり、農村部では子どもたちのコミュニティが崩壊している。子どもとのつながりがなくなると、親のつながりもなくなってくる。さらに大人たちが地域活動をしようとしたときに、コミュニケーション不足で集まりが減っている。高齢者は昔の名残があるため、きちんと集まってごみ拾いなどの地域活動を行っているが、下の世代はコミュニケーション不足を感じる。将来的には地域活動がなくなり、寂しい町になってしまう。今からでも子どもたちを利用したコミュニケーション作りを進めていけば良いと思う。地域のイベントがあれば良いが、企画するのが大変なため、企画者がいない。イベントがなくなっていくのが寂しい。

メ7：昔は町内会の子ども会の中で、お祭りをやっていたが、今は縮小されてしまっている。企画して準備するのが大変なため、縮小・中止の風潮がある。子ども的人数も減り簡素化されている。

コ：子どもが減る。イベントが減る。大人のコミュニケーションが減る。地域コミュニティの衰退という負のスパイラルになっている。

ナ：幕別町も同じで町内会や子ども会はあるが、子どもの数が減って、活動がなくなってきている。コミュニティが少なくなってきていると感じる。

コ：前回の議論でもコミュニティはあった方が良いという意見があったと思うが、現実的に難しいと感じるか。

メ3：自分が子どもの頃は学校でキャンプや親子レクリエーションが年に数回あったので、友達の親とのつながりもあった。小学校を卒業すると、そういうものがなくなり、つながりもなくなってしまった。

コ：小さいときにあったものをすべて復活させるわけではないが、面倒だと思ってもイベントをやることで、つながりの場を作ることで生まれるものが多い。例えば小学生や中学生が友達の家に遊びに行くことは日常的事か。東京では特別なことと感じている。

メ5：日常的事だと思う。

コ：日常的事であれば、子ども同士のコミュニケーションが図れて、コミュニティの衰退が防げるのではないという発想になると思う。

メ1：リーダーシップをとる人がいなくなったと感じる。大人も含めてやりたいと思っても、言えない人が多くなってきていると感じる。

コ：昔は町内会長がそういう役割を担うことがあったと思うが、今はどうか。

メ1：それぞれの町内会によるのではないかと思う。

メ2：都会に住んでいたときは、町内会費は月300円だった。また、段ボールや瓶、缶などを出すと、ゴミ袋等のバックがあった。役員をする人はボランティアではあるが、積極的にお年寄りに参加を呼び掛けたりするなど、住民に対しての積極性があった。清水町ではそういうものがなく、自分のことしか考えていない。町内会費を飲み会ばかりに使っている。人に対して何かしてあげようという気持ちが少ないと感じる。清水町は自然がきれいで素晴らしいと思う。以前住んでいたところでは、ふれあい動物園があった。それが子どもを引き付けるため、子どもや親のコミュニケーションにつながっていた。

コ：前回のアンケートの中で高齢者の数の変化について質問があったので、紹介をさせていただく。今の65歳以上の人数が3,200~3,300人であり今がピーク。今後10年後はなだらかに減少していく。20年後は3,000人程度。40年後には2,300人程度まで減少する。今後高齢化率は上昇するが、高齢者数は減っていく。

事：過去のデータを見ると、平成3年は高齢化率が16.03%だった。平成22年は30.14%、令和2年には36.72%になっており、30年間で約20%上昇している。

メ6：以前にも話したが、高齢者の足の確保が重要だと実感している。地域コミュニティにもつながってくると思う。近隣との付き合いがあれば、気兼ねなくお互いに助けあうことができると思う。



メ7：義理の母親は下半身に障害を抱えている状態で音更に住んでいる。何か不便があったときに頼りにするところがなかった。緊急時に頼れるところがほしいと感じる。

コ：どの町もコミュニティバスが走っているが、利用率が少ない。今年度からある自治体ではコミュニティバスをやめて、タクシーの補助金に変えた。コミュニティバスより圧倒的に利用者が増えた。個人の活動に対してどこまで税金を投入するのかという問題もあると思うが、その自治体は住民の移動をどう確保するかという観点ではコミュニティバスと同じという考え方としている。

メ1：医療福祉が充実していないとこれを理由に転出する人もいるかもしれない。子育て移住や介護移住ということもある。清水町で子育てをしてよかったと思えるような体制づくりが必要だと思う。

メ2：行政は形だけ作って終わりのケースが多い。コミュニティバスの利用率が低いのであれば、廃止をしてそのお金を住民から要望があったときに対応できるような福祉タクシーに変えて台数を増やした方が良いのではないか。これが医療福祉にもつながってくると思う。町の職員も一町民という自覚をもって、自分がどうされたらうれしいかを考えて行動してもらえたら良いものができると思う。

コ：企画課はこのような議論をする場を作っているため、総合計画の作成に対して本気を感じる。もし形だけ作るのであれば、大掛かりにこんなことをする必要はない。自分たちで作ってしまうこともできる。誰が来るかわからない状況を作って、今回のような会議を行っているということは本気で取り組んでいる証拠だと思う。

行政と町民のコミュニケーションが少ないという気がしている。この会議をきっかけにいろんな人と会話していければと思う。

メ3：以前に今すぐ高齢になるわけではなく、積み重ねという意見があった。いろいろな世代がいるため、1人ずつに対応していくことは難しいと感じている。個別対応ではなく目的・用途別に対応するなど、様々な人に対応する工夫が必要だと感じる。

メ4：高齢者の定義が65歳ではなくなっているのではないかと感じる。65歳を超えても車を運転して元気な人も多いため、高齢者の位置づけを変えるべき。

事：全体を通して感じたことは、それぞれの年代の育った環境が違うため、様々な年代に合わせて行政や地域コミュニティがどれだけ対応していけるかが解決の鍵になってくるのではないかと感じる。

いかと感じた。

コ：後半を振り返ってみたいと思う。提案4についてはコミュニティが生まれるのは子どもがきっかけになることが多い。このため子どもが減少することによってコミュニティの衰退にもつながっている。町内会という地域コミュニティだけでなく、また別のことを1つのきっかけにして、子どもを視点にしたコミュニティ作りを考えていく。移動手段については、突発的な移動のサポートはできていないが、そこだけをどうするかだけでなく、行政がやっているコミュニティバスの利用率が低いという現状があるが、いかに改善していくかを行政だけで考えるのではなく、行政がいろいろな組織のつなぎ役となって仕組みづくりをしていく必要がある。提案6は制度が充実していることだけでなく体制と意識を変えていかなければならない。

ナ：時代に合わせた体制づくりが大事ではないかと思う。

## 第2班 情報発信班

コーディネーター：渡辺浩二（芽室町役場）

ナビゲーター：藤谷満伸（大樹町役場）

コ：前回のアンケートの中で3つ質問があった。1.「ブログ、Instagram、Facebook、Twitter、LINE、Youtubeなどの伝達方法を具体的に知りたい。」、2.「自分ごと化会議の先輩市町村ではこの会議をどうつなげている例があるのか知りたい。」、3.「予算など、行政（発信側）の課題の（現実）を知りたい。」これらについて事務局より説明をお願いしたい。

事：1.今はSNSを使って、簡単に情報を発信できるツールがたくさんある。実名を使うFacebookや匿名性は高いが、たくさんの人が自由に発信できるTwitter、電話番号を介して友人同士でつながるLINE、動画サービスを中心に発信しているYoutubeがある。清水町では町の情報をFacebookを利用して発信している。また、防災Twitterもやっているが、災害が起きていないときは発信することがないため、登録人数が少ない状況にある。Instagramに関しては、観光協会が中心となって、景色やイベント情報を発信している。これから役場の若手職員が中心となって、ユーチューブチャンネルの作成や業者に委託をしてPR動画の作成などを進めている。将来的にはもっといろいろな情報ツールが出てくる可能性があるため、これら以外の情報発信もやっていかなければならない。

2.先輩市町村に福岡県の大刀洗町という自治体がある。審議会や協議会を行うときには無作為抽出を決まりとしている。今回は総合計画の作成のために集まってもらっているが、これは様々なところで利用できる。清水町でこれから考えられるものとして、体育館の建替えや清水公園の整備の話をするときに、有識者の話ばかりではなく、様々な町民から無作為抽出という手法を使って意見を聞くことができる。今までは識見の有する者が宛職で会議に参加してもらっていたが、自分ごと化会議を通して長い期間清水町のことを考えてもらっているので、十分に団体の長と肩を並べられるくらいの貴重な人材だと思う。これから無作為抽出で選ばれた仲間達を増やしていきたいと考えている。今参加していただいている方は、これから無作為で選ばれた人たちがどう議論していけば良いのかアドバイスをする立場になってほしい。これを繰り返すことで、清水町は将来的に町民全員が町づくりの話をするときに召集がかかるかもしれないといった町にしたいと考えている。大刀洗町は毎年無作為抽出をしているため、OB会が組織されている。今は行政が皆さんを招集しているが、住民協議会が中心となって、講演会の企画や、議員との懇談会、町長との懇談会など行政が会議を仕切るのではなく、住民協議会が会議を仕切る先進事例もあるため、清水町もそういった形で住民協議会が町づくりをリードしてほしい。

3.この自分ごと化会議から出てきている意見が課題だと思う。役場は課題に対して優先順位をつけて予算をつけているため、情報発信という課題に対してどの程度住民が優先順位を高くすることができるかにかかっている。もし情報発信の優先順位が低いと住民が思っているのに

も関わらず、いつまでも役場がそれに甘んじているのだとすれば、町民の思いと行政の思いが乖離していることになると思う。町民の思いに行政が敏感に反応していくことが大事だと思う。

コ：今回4つの提案に分けている。それぞれいずれかの提案の参考になる話だったと思う。この提案書が総合計画に盛り込まれてくることになっている。この提案書の内容が実現していけば、情報発信の課題が解決していくことも想像しながら議論していきたい。初めに提案1を振り返りながら内容を確認したいと思う。提案1は必要な情報を求めている人のところへ必要な情報が届くようにするためにも、時代の移り変わりを意識しながら、情報を発信する主体・内容・方法・媒体を考え、双方向に情報が行き交い、対話の生まれる清水町をつくっていくとしている。これは清水町内にどのように情報が行き届くかのテーマになっている。

メ1：今までの議論内容がうまくまとまっていると思う。

メ2：提案内容のままで良いと思う。

メ3：今までの議論が概ね網羅されているため、内容的には良いと思う。町職員と町内会を通して意見交換をするというのは大事になってくると思う。さらに情報を得るために町職員が日々の業務の中で住民からの問い合わせに対して、その場で終わらせるのではなく、どのような問い合わせがあったかについて整理することで、町民がどのような情報を知りたいと思っているのかわかるため、情報収集の一つの手段だと思う。

コ：役場職員は町内会に加入しているのか。

事：おそらく多くの町民の人は役場職員が町内会の活動に参加していないと感じていると思う。役場職員も町内会活動に積極的でない職員がいるのも事実だと思う。町内会活動に対して強制はできないが、町長や副町長も気にかけており、訓示では町内会活動に参加してほしいと伝えている。情報発信の機能は昔より優れているが、町民のニーズに答えられていないことが問題で、昔の方が情報媒体が少ないにも関わらず、満足度が高いのであれば、昔は町民と役場職員が直接話し合いをできる環境が多かったのではないかと思う。職員にも対話を通して情報を収集する手法が大事だということを伝えていきたいと思う。情報発信がうまくいっていないのは、このミスマッチが原因ではないかと前回の会議から感じているところ。

メ4：町長と語る会は昔からあると思うが、都合が合わずなかなか参加できない人も多い。町長と語る会を各課別に細分化することで、もし伝えたいことがあるのであれば、担当課の会合に参加をすることで意見交換を行うことができる。この方がより専門的な議論ができると思う。

コ：前回の会議でも対話や双方向性という言葉がキーワードとなった。職員と語る会は良い意見だと思う。

事：〇〇課長と語る会はぜひ提案に加えてほしい。

メ5：総合計画の中で、この10年間でこれだけはやりたいというものを提案書に盛り込みたいと思う。

コ：提案が4つあるため、この中で優先順位をつけるなどして、これだけはやりたいということ伝えていきたい。

メ6：10年後を考えると、今とは全く違う時代になっていると思う。時代に対応していくために準備をしていくことが大事だと思う。

コ：町のインフラ整備はどうか。

事：新聞にも掲載されていたが、農村部も含めて町全体に光回線を整備することを今年と来年にかけて行う予定となっている。

メ2：行政の部分でかけられている期待がすごく重たいのではないかと思う。この提案書を見た役場職員がやりたいと思うことができれば、自主的な参加にもつながると思うので、もう少し方向性で分けて、提言の数を絞れたらいいのではないかと思う。

メ7：個人の SNS で写真などを載せるとあるが、匿名性の高いツールで防災 Twitter 等をフォローしてしまうと、清水町民ということがわかってしまうため、フォローできない場合がある。必ずしも防災 Twitter のフォロワーが少ないからと言って機能してないわけではないと思う。フォローしなくても情報を見ている人はいるため、これからも続けていってほしいと思う。実名でも匿名でも情報発信ができるようなものを考えていけなければならない。

コ：デジタル時代の不安の解消も必要になってくる。

事：確かにフォロワー数を気にする必要はないかもしれない。

メ4：広報誌はどのくらいの職員が携わっているのか。

事：広報誌やお知らせ版、ホームページ、SNS を2人の職員で行っている。

メ4：学校のパンフレットなど自分には関係のないものもたくさん広報で回ってくる。この編集を行う労力を考えると、1つに集約してみてもどうかと思う。広報でサークル等の仲間を集める広告を掲載することができないか。新聞折込をするには莫大なお金がかかる。

コ：町民の声を載せるのは良いことではないかと思う。

ナ：大樹町では利益に関わるものは載せられない決まりとなっている。もし掲載するのであれば有料広告の枠を設けているので、お金を払って掲載することになる。

事：仲間を募るくらいであれば良いのではないかと思う。

コ：提案2は「町の強み（魅力）は何なのか」「それを誰に届けたいのか」「どのように届けるのか」「そのことで町がどう変わっていくのか」を改めて整理して、それぞれの立場で、リアルで生々しい情報を発信していくとしている。提案3は町の一番の強みである「農業」や「食」などを活かしたPRを強化することで、住民・事業者・来訪者のそれぞれが笑顔になる清水町をつくっていくとしている。これら2つについて意見をいただきたい。

メ1：都会にはない大自然や農業が清水町の強みである。都会の人を呼び込むための方策としては道の駅を作り、農産物を販売する。ボランティアで発信する人を集めて、広報誌の中で発信していくことなど他の町にはない独自性をもったものを企画・実行するきっかけづくりを行政にしてもらいたい。大きなイベントを開催するだけでなく、小さな集まりが活発に活動できるようなサポートも大事だと思う。

メ3：町の一番の強みが「農業・食」と記載してある。これらの具体的な強みとは何なのか。牛が多く、乳量の生産量が多いなどいろいろあるが、農業や酪農をしている人以外の他の町民にはあまり関わりがないと思う。町民が清水町の強みを認識するために何をしたら良いか。

コ：農業の強みとは何なのかをどうやって住民に伝えていくのが大事。これが清水町の魅力を知る機会にもなる。誰がどのような場面で伝えていくのか。

メ7：個人で販売している野菜をどこで買えるのかわからない。いつどこで販売しているのか伝えられる手段があると良いと思う。

メ5：3丁目広場で農家が農協に出荷できなかったものを集めて販売している。台風災害のときに石山地区の農家が被害を受けたため、そこに清水町の道の駅を作ったらどうかと町長へ提

案したことがある。道の駅に農産物を集めて、いろいろなものを販売する農業公園のようなものをつくってみてはどうかと話をしたが回答がなかった。またフロイデ温泉の跡地利用について清水町の農産物を使った新たなメニューを開発する農業開発試験場のようなものを作ってみてはどうかと考えている。いろいろなご当地メニューを開発することで、町外の人が食べにくる機会が増えると思う。これからの10年後はスマート農業の時代になる。スマート農業についての研修を清水町で大々的にやっても良いのではないかと思う。町民が農業者に出資をするような会社を作っても良いと思う。これに行政も加わることによって、他にないものが清水町にできると思う。提案内容にも「自分の目、耳、口で清水町の農業・食を実感する。」と書いてあるので、ぜひ開発試験場を作ってもらいたい。

事：フロイデは町の財産ではないため、手出しすることが難しい。

メ5：農業については農協だけでなく、生産者に意見を聞くことが望ましいと思う。お客さんと対話できるということが道の駅の強みであると感じる。土幌町などあらゆるところで道の駅が作られているが、生産者がどのように関わっていくか苦心していると聞いている。実際に農業に携わっている人の意見も聞かなければならない。個人的には有機農業に取り組んでいる農家が少ないため、ぜひやってほしいと思う。酪農と畑作が一緒になって有機農業をするイメージがあるので、発信していきたいと思う。大量生産ではなく、安心安全のための農業を進めていってはどうか。

メ4：農業の6次産業化の問題に対して、取り組んでいることはあるか。

事：個人レベルではいくつか事例があるが、個人に頼っているのが現状。かつては、産業クラスターなど第6次産業化に向けて取り組んだこともある。今と時代が変わったこともあるが、役場職員が考えても民間事業者には敵わない部分がある。

メ5：役場が6次産業化に向けた補助金を用意するべき。耕地面積を持っていてもノウハウを持っていない人もたくさんいる。農業生産法人を作っているところが少ない。

事：清水町は農業の町と言うが住民への恩恵がない。十勝というイメージでぼんやりとした強みはあるが、活かしきれていないと感じる。提案書の中の「住民・事業者・来訪者のそれぞれが笑顔になる」ということを意識しなければならない。本当に清水町の強みが「農業・食」であるのであれば、例えば食を活かした企業誘致や清水町民が町外の人に説明できるようなマップの作成などを考えなければならない。いろいろなものに対して出口につながるよう意識をした情報発信をしていかなければならないと感じた。

メ6：清水町の農業は他の町の人と話していても有名と感じる。しかし、実際に食べた感想を聞いたことがないため、食べたことがない人も多いと思う。清水の農産物を食べてもらえるような工夫が必要だと思う。

コ：提案4は情報発信に限らず、住民一人ひとりがまちのことを自分ごと化して、清水のミライをみんなで考え、それぞれの立場でまちづくりに関わりつづけていくとしている。情報発信そのものではなく、この会議が終わった後に、どのようにまちづくりに関わっていけるかの部分となる。

メ8：現在もガラケーを使用しており、最新の情報ツールについていけるか不安を感じている。10年後の清水町のことを考えて、よりよい暮らしに向けて自分も前に進んでいかなければいけないと感じた。

事：清水町の情報はどうのように収集しているのか。

メ8：ロコミで収集している。

事：この会議のように勉強熱心の人が集まると、最先端の技術の話になりがちだが、これに支配されるのは良くないと思う。苦手な人がいて当たり前。いろいろな人間が自分のペースで豊かに生きていくための情報を得られれば十分だと思っている。将来どれだけネット社会が発達しても、広報などの紙媒体を廃止する考えはない。

メ4：自分ごと化というテーマが引っかかる。やってみたいことがあっても、行政のサポートがあればできるかもしれないが、1人ではできないことが多い。そういう意味では自分ごと化ではなく、他人事化のようにも感じる。

事：貴重な時間を割いて、町のための話をしてくれているだけで、町づくりを自分ごと化していると思う。自分でできることには限界があるため、それを補完するために行政や地域があると思う。町民がこの会議のように人を集めて何かをすることはすごく大変だと思う。行政は意見をもらうための場作りに全力を尽くす、町民は場に参加をして意見を言うような役割分担ができれば良いと思う。

メ4：農業は全て農協主体となっているため、新しいチャレンジが起こりにくい。誰かがチャレンジをしようとしたときに、広報などに掲載することで和を広げていくことが大事。

メ2：情報発信という枠で考えると、橋渡しを促進することに尽きると思う。そこを軸に提言



できると良いと思う。

メ5：6次産業化については、農政事務所に聞きにいったことがあるが、全国的に予算もつかないため、もうだめだろうという回答だった。農業者以外の方が農業を始めようとしたときに、農地を持ってないため、何も生産することができない。役場が小規模で農地を売り出してみてもどうかと考えたこともあるが、法律をクリアするのは難しい。役場職員は消費者の立場でしか考えることができないため、役場職員と生産者が交流する場を作れたら良いと感じる。

(休憩)

コ：前半の話を聞いていて、情報の行き交う対話の場作りが必要ではないかと感じた。どんなテーマの場があれば参加したいと思うか。

メ7：行政からこのテーマで話をしてみませんかという情報の周知があれば、開催者が個人であっても、参加しやすいと思う。

コ：芽室町では広報誌の中に毎月ハガキを入れており、年間200件くらいの苦情や意見などが返ってくる。これに対して1件1件回答をしている。このような情報のやり取りの中から政策につながることもある。

メ7：人の集まる場で意見を言うのが苦手な人もいる。匿名でないと言いづらい意見もあるため、紙に書いて送るといった手段も大切だと思う。

コ：農業者は農業に強みや魅力を感じていると思うが、町民がどこまでこの強みや魅力を知っているのか。知ってもらうことが大事だと思うため、どうやって伝えていくのかが重要だと思う。

メ6：子どもが農業体験を通して、魅力を感じてもらうことで、興味を持ってもらう。また、清水で手軽に食べられる高校生をターゲットにしたご当地メニューを開発することで、SNSを通して広がっていくのではないかなと思う。

メ5：昔は食べるものがなかったため、近所の農家に手伝いに行き食べ物ももらっていた。そのとき食べていた味は今でも覚えている。今はそこまで空腹を感じて、食べ物を食べることがないため、今の子ども達は余程おいしいものを食べないと印象に残らないかもしれない。そういう意味では農業体験が重要になってくると感じる。農業に対して、行政や町民、消費者がもっと関わりをもつべき。その仕組みをどうするのか。

メ4：これだけ町民が清水町を農業の町だと言うのであれば、町営の農業レストランをやってみてはどうか。新鮮な食品も使え、雇用も生まれる。また、複合的な道の駅を考え、農業体験からレストランまでを網羅したものを作っても良いのかもしれない。これは町が主導で農協へ提案をし、協力してやっていく必要がある。

メ1：町内に発信力の強い住民もいると思うので、そういう人たちの集まる場を作っていければと思う。

メ7：町に住んでいる人だけでなく、町外の人で清水町に興味をもってくれている人に情報発信をしてもらおう。清水町出身のスポーツ選手などを大事にしていくのも一つの手段だと思う。